慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	DrydenとRymerの思想的交流：序説
Sub Title	Personal relations of Dryden and Rymer : An introduction
Author	岩崎, 良三(Iwasaki, Ryozo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.307(40)- 314(33)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0314

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Dryden と Rymer の思想的交流

——序　説——

岩　崎　良　三

Dryden は1677年の夏の終り頃か早秋に the Earl of Dorset に宛て書いた手紙中で最初に Rymer の名を挙げている。(1)「Mr. Rymer が私に彼の書物を送ってくれました。それは今まで私の最良の慰みになっています。それは極めて学識に富んだもので英語で書かれた，恐らくは現代の他の如何なる言語で書かれたものの中でも最良の批評作品です。私が彼の意見に全面的に賛成ではないにしろ，彼の云うところの大部分には同意見です。そして彼が Shakespeare や Fletcher を手厳しく，且つ機智に富んで攻撃したようには，私を攻撃しなかったことを私自身幸福に思っています。なぜなら彼は詩人の弱点を見出すことのできる私の知る唯一の人ですから。もし彼がその *Edgar*(2) を彼の敵の非難を招くことなしに，この位置に保ちうるなら，彼に敢えて答える者も，あるいは答えうる者もないと思います。……」

これは最高の讃辞であるけれども，それには Dryden の手紙が Dorset に宛たものだということをまず考慮に入れなければならない。*The Tragedies of the Last Age* は Rymer の Gray's Inn の fellow member である Sir Fleetwood Sheppard に献じたものであるが，Sheppard は Sedley や Rochester の仲間であり，Dorset の生涯の友人であった。Rymer をロンドンの文壇や Dorset に紹介したのも彼であり，Rymer は Dryden と

(1) Charles E. Ward(ed.): *The Letters of John Dryden*, 1942, 'Letter 6," pp. 13–14. Dryden はこの夏故郷の Northamptonshire に帰り，この手紙を書いた時は Lilford にある従兄弟 Sir Thomas Elmes の家に滞在中であったらしい。Dryden が寄贈された書物は勿論 *The Tragedies of the Last Age* (1677) である。

(2) *Edgar* は Rymer が己の劇作理論を忠実にあてはめて書いた heroic play で，上演はされず，1677年秋に Richard Tonson によって出版されたが，売れなかったらしい。Wycherley と Dryden は *The Tragedies of the Last Age* の出版前に *Edgar* を知っていた。

は Dorset を通じて知り合ったのである。[3]

Rymer のこの書物に対する Dryden の真の評価はいわゆる "Heads of an Answer to Rymer" 乃至はそれを更に発展させたと考えられる "Preface to *Troilus and Cressida*" (1679) に見られよう。また上記の手紙中で「Shakespeare への機智に富んだ攻撃」といっているのは，Dryden がこの批評をまだ読了しないうちに書いたものとも考えられる。[4]

殆んど同時期に書かれた "Preface to *All for Love*" (1678) 中で Dryden は「この劇では，Mr. Rymer が機宜に適していった如く，我々の師であり，また師であるべきである古代人の慣行に従うように努めた。」という。[5]

そして Rymer の *The Tragedies of the Last Age* 読後にその書物の前後の余白の頁に書き込んだ有名な "Heads of An Answer to Rymer" と呼ばれている覚書の中では，Dryden は自分の反対者の主張に相当な功績を認めている。Rymer のこの批評はある意味では Dryden の *Essay of Dramatic Poesy* を論破しようとしたものであったとも考えられるだけに，Dryden はこれを極めて熱心に読んだ。殊に Dryden があまりよく読んでいなかったギリシャ劇を Rymer が直接知っていることを知って興味を覚えた。

「この著作に対する私の判断は次の如くである，即ちそれは極めて学識あるものであるが，その著者は英詩人よりも，ギリシャ詩人をよりよく読んでいる。また私がかつて古代人について読んだ説明の中の最良なるものとして，すべての作家はこの批評を学ぶべきである。また彼がここで我々に示している悲劇のモデルは見事で，且つ極めて正確であるが，それはすべての悲劇の唯一のモデルではない，なぜならばそれはあまりに plot や character 等に制限されすぎている。そして最後に，我々はこの著者と共に，我々自身の国に対する偏見において古代人に優先権を与えることなしに，古代人を正しく讃え，且つ模倣することを教えられよう。」[6]あるいはまた「ギリシャ人に反対して英詩人弁護のために Mr. Rymer のこの見事な批評に答えようと企てる者は誰でも……彼が論争するところのものの最大部分をまず彼に (*i. e.* Rymer) 屈しなければならな

(3) Curt A. Zimansky: *The Critical Works of Thomas Rymer*, 1956, Intro. xiii.
(4) *Cf.* Zimansky, p. 194.
(5) Ker: *Essays of John Dryden*, I, 200. 猶 1677年8月 Rymer の批評が出版された時 Dryden は *All for Love* を執筆中で，その上演は同年12月であった。この劇の構想に Rymer の影響があったと信じることは難しいようである。しかし「その taste が喜劇に限られている a witty man によって悲劇は判断されるべきでない。」(Ker, I, p. 196) と云っているのは Rymer を意識していたのかもしれない。(Zimansky, p. xxxvii.)
(6) Scott: *Dryden's Works*, xv, pp. 389-390.

い。」[7]

以上の引用によって Dryden は Rymer の立場に根本的に不賛成であるというのではなく Rymer の主張を幾分緩和しようとして "Heads of an Answar" を執筆したものと推測されよう。

フランス古典主義の原則によって Shakespeare を説明しようとした "Preface to *Troilus and Cressida*" (1679) 中では Dryden は Euripides の *Iphigenia* 中に彼が認めるいくつかの長所を論じ，Agamemnon と Menelaus との場面を特に推賞して引用し始めるが，「しかし私の友人 Mr. Rymer は広汎に且つ非常に優れた批評眼をもってこの場面と Melantius と Amintor の場面とを比較しているので，これ以上いうことは余分であろう。」[8]また「Shakespeare や Fletcher がその plots のすべてにおいていかに欠陥を持っていたかということは Mr. Rymer がその批評の中で発見している。」[9]と Rymer を讃え，また *The Maid's Tragedy* 中で悪徳に充ちた王を描いたことで Fletcher を非難した Rymer に賛成している。[10]

また Dryden は "A Discourse concerning the Original and Progress of Satire" (1693) 中では Milton の *Paradise Lost* に触れているが，「しかし私は Mr. Rymer の仕事を彼の手から奪うつもりはない。彼はこの著者に関する批評を世の中に約束している。」[11]からとて，自分自身の Milton 論は簡単に切り詰めている。けれども Dryden が期待した Rymer の Milton 論は遂に発表されなかった。[12]

以上のようにこの頃までは Dryden は Rymer の批評的手腕と学識に相当な敬意を払っていたことは明らかであるが，Rymer の方は Dryden をいかに評価していたであろうか。これには *Preface to Rapin* (1674) の結末で Rymer が様々の文学から夜につい

---

(7) Scott, xv, p. 387. (8) Ker, I, 206. (9) *ibid.*, 211. (10) *ibid.*, 218.
(11) *ibid.*, II, 29.
(12) Rymer はエピック論を含む *Preface to Rapin* (1674) 中でも Milton を黙殺したが，*The Tragedies of the Last Age* の巻末近くでは *Paradise Lost* 論を書く計画があることを明らかにして，「ある人々は詩と呼んで喜んでいるが」と *Paradise Lost* に対し極度な軽蔑の意を洩らしている。The Earl of Dorset が *Paradise Lost* の真価を認めた最初の人々の一人だという挿話に何等かの真実性があるものとすると Dorset に献ぜられた *A Short View of Tragedy* (1692/3) 中に Milton 論が含まれるのは不適であったろうと Zimansky は云う。(p. 216) Dorset が書肆 Little Britain で *Paradise Lost* を買求めた話は Malone の *The Life of Dryden* (p. 112) にある。
Sixth Earl of Dorset 即ち Charles Sackville (1638-1706) は Dryden の *Essay of Dramatic Poesy* 中に Eugenius として登場する人物であるが，悲劇 *Gorboduc* の著者の一人 Thomas Sackville の曽孫に当る。Rymer がこの劇を賞めているのはそのことも考慮に入れるべきだ。((Zimansky, p.233)

てのいくつかの描写を比較して，Dryden の *Conquest of Mexico* 中の数行を最上の例として選び出したのが唯一の手がかりである。即ち，批評家としての Dryden よりも詩人としての Dryden を Rymer はまず認めたことになる。即ち

「All things are hush'd, as Nature's self lay dead,

The Mountains seem to Nod their drowsie head,

The little Birds in dreams their Songs repeat,

And sleeping flowers beneath the Night-dew sweat,

Even Lust and Envy sleep. 〔In *the Conquest of Mexico.*〕

この描写の中では四行が他のいかなる言語の詩の二倍よりも材料のより大きな多様性とより適切な思考を与えている。ここには最も大胆な空想が到達したよりも，もっと幸運な何ものかがあり，そして最も厳酷な理性が観察したよりも，もっと適当な何ものかがある。」と云って Statius, Marino, Virgil, Tasso に比較して激賞している。(13)

1680年代にはDryden と Rymer とは互に相手に敬意を抱いた友情が存在していたことは明らかである。Dryden が書肆 Tonson のために編輯した三冊の書物に Rymer は

(13) Zimansky, pp. 15-16. Dryden の引用は Act III, Scene ii. の冒頭にある Cortez の独白。猶これは Rymer が指適する通り Statius の *Sylvae*, V, iv, 3-6. にある次の一節に基くものである。

Tacet omne pecus volucresque feraeque
Et simulant fessos curvata cacumina somnos,
Nec trucibus fluviis idem sonus; occidit horror
Aeguoris, et terris maria acclinata quiescunt.

(大意) あらゆる家畜や鳥や野獣は静かに横たわっている。湾曲せる山の峰も彼等の疲れた眼りを眼っている如く見えるし，激流はその轟きを鳴り秘めた。海の波も鎮まり，海は大地の胸に倚りかかって休息している。

この一節は Rymer が賞めたためかどうか分らないが，極めて有名になり，1699年に Tom Brown がパロディ化し (*Familiar and Courtly Letters*, London, 1700, p. 181)，又 Pope も *Dunciad*, II, 418. で "And all was hushed, as Folly's self lay dead." とパロディにしている。Dr. Johnson は *The Life of Dryden* 中で「Rymer が有名にした」一節として言及し (*Lives*, I, 184, Everyman's Lib.)，又これより以前にこの一節を Shakespeare の *Macbeth*, II, ii, 62. と比較して論じた。(*The Plays of William Shakespeare*, London, 1765, 6, 404-5) けれども Wordsworth は「Dryden のこの詩行は曖昧で，誇張的で，意味のないものだ。」と非難している。(*Poetical Works*, ed. De Selincourt, Oxford, 1944, 2, 420) Mark Van Doren も Wordsworth の考えに賛意を表し「Dryden はその自然猫写では成功したことが稀であった。」と云う。(*John Dryden*, New York, 1946, p. 10)

寄稿している。[14]又 "The Vindication of the Duke of Guise" (1683) 中では Rymer を「優秀な批評家」(an excellent critic) として一寸言及している。

1688—9年の革命は Dryden の身分に大きな変動をもたらした。彼は Poet Laureate たることと Royal Historiographer たることを Thomas Shadwell に譲らざるを得なくなると共に，年金をも失つた。Dryden は宮廷から解放されると同時に，宮廷乃至は政府当局に様々の不満を抱くようになった。Dryden の後継者 Shadwell は 1692年11月19日（又は20日）に死んで，the Earl of Dorset（当時は Lord Chamberlain をつとめていた）の推挙で Nahum Tate が Poet Laureate に任命され（1692年12月24日），Royal Historiographer には Thomas Rymer が年俸200磅で任命された（1693年）。即ち Poet Laureate とRoyal Historiographer とは Dryden と Shadwell の場合には兼職であったのである。

この事件は1692年末に出版された Rymer の *A Short View of Tragedy* 中にある Dryden 批判と共に Dryden と Rymer との友情に大きな変化をもたらした。これより数年前即ち1688年に Rymer は "An Epistle to Mr. Dryden" と題する韻文を発表している。(Macdonald, 256 a, 256 b.) 第一行は 'Dryden, thy wit has catterwauld too long,' と云って口汚く Dryden を攻撃したものであるが，これは少くとも一時の興奮で書いたもので，公刊の意志はなかったものらしいと Zimansky は主張する。しかし果して Rymer の筆になるものか否かも明白でないものである。(*Poems on Affairs of State*, 1707, xv. の広告中で Mr. Rymer によるものと云われているものである。*Cf.* Macdonald, p. 263)

A Short View of Tragedy (1693) 中では Rymer は屢に Mr. Bayes と *The Rehearal* に言及し，特に第一章の結末では模範的悲劇の作法を示して *The Invincible Armado* と題する悲劇を Dryden が執筆したならと皮肉な提言をしている。[15] Dryden がこれに立腹したのは明らかであり，Rymer に対する従来の態度を一変した感情を示す最初の

(14) 即ち〔1〕1680年には Ovid's *Epistles*, tr. by Several Hands 中に Rymer は 'Penelope to Ulysses' を (H. Macdonald : *John Dryden, a Bibliography of Early Editions and of Drydeniana*, Oxford, 1939. 中の11.)，〔2〕1684年には Plutarch's *Lives*, tr. from the Greek by Several Hands, 1683-6. 中の Vol. III (1684) に 'The Life of Nicias' を (Macdonald, 131 a)，〔3〕1684年の *Miscellany Poems* 中に Ovid, *Amores*, III, 6. (Macdonald, 426) を寄稿した。しかし Dryden の編輯した刊行書の中には彼の敵も何か寄稿しているからこの事実は余り友情とは結びつけることは出来ない。

(15) Zimansky, pp. 91-93. 猶 Bayes〔*i. e.* laureate〕は *The Rehearsal* の主人公の名で勿論 Poet Laureate である Dryden を指す。

発言は，1693年に Walsh 宛に書いた手紙中に現れている。[16] 即ち「Rymer に対してではないが，古代人の chorus に反対する我々の主張の一擁護者として」挑戦するよう熱心に勧告している。[17]

同年8月 Dryden は "Examen Poeticum" を出版して，その中で彼は政治と批評の双方における偽善と無智とを猛烈に攻撃した。そして一般批評家，特に Rymer について「拙悪な作家は通例最も鋭い非難者である，何故なら彼等は最良の詩人で且つ最良のパトロン[18]が云われた如く，

When in the full perfection of decay,

Turn vinegar, and come again in play.

（完全に腐敗して酢となり，再び活動し始める）

かくして詩人の堕落が批評家の誕生となる，私は現代において一般に認められている意義における批評家を云っているのだ，何故なら昔は彼等は全く異った種類の人間であった。彼等は詩人の擁護者であり，その作品の解説者であった……」と云う Dryden の有名な一節を生むことになった。これには Rymer が一時詩人であったこと，而も成功しなかった詩人であったことを想起する必要がある。又同書中で「私が公然と攻撃されたのであるから，私自身を弁護することが出来るだろうと思う……しかし現在はそのような仕事に対する暇もなければ，手段もない……」[19]

Dryden は1693年8月30日 Tonson 宛の手紙で「約二週間前に私は一友人から手紙でこう知らされた，即ち Secretaryes の一人，多分 Trenchard が女王に教えたのだろうが，私が私の Lord Radclyffe 宛の Epistle の中で彼女の政府を非難した（これがその言葉のままであるが），そこで彼女はその Historiographer Rymer に私の劇を攻撃する

(16) Ward (ed.) 'Letter 24.' William Walsh (1663-1708) の抵評家及び詩人としての才能を Dryden は高く評価した。1691年に *Dialogue Concerning Women* を初めて公刊。後に Pope, Wycherley, Congreve, Vanbrugh 等の友人となり，Pope の *Pastorals* 改訂に助力した。

(17) "Parallel of Poetry and Painting" (1695) 中で Dryden は chorus を含む劇を書く意向を表明している。彼の chorus への反対は小さな英国の舞台では余りに費用がかかりすぎるという実際的なもので，chorus 自身の本質的弊害については何も述べていない。(Ker, II, 144)

(18) Lord Dorset の "To Mr. Edward Howard on his incomparable, incomprehensible Poem, called *the British Princes*" よりの引用，少し語句が変えてある。(Ker, II, 2-3. 及び notes) 原詩は次の如くである。"But, in its full perfection of decay/Turns vinegar, and comes again in play." (ll. 7-8.) (Vivian de Sola Pinto ed.: *Restoration Carnival*, 1954, p. 128.) 猶 *The British Princes* (1669) は Edward Howard (b. 1624) の単調で冗長な epic である。

(19) Ker, II, 5-6.

よう命じたと，そしてそのことを今行いつつあると彼は確信していると。私は貴君が私に教えた前のヒントから彼の悪意を疑わない，そして若し彼が〔この仕事に〕雇われるなら，それは彼自ら求めた事と確信している。彼は御承知の如く彼の最近の批評で私のことを悪しざまに云い，それが再び私に悪口を云う機会を与えたのだ。」[20]

しかし Rymer の Dryden 劇批判は実現されなかった。Dryden は彼の最後の劇作となった *Love Triumphant* (1694) の 'Prologue' 中で，観客の各々に想像上の遺贈を行っている，特に彼の批評家達に。Rymer もその遺贈を受ける一人である。

To Shakespeare's critic, he bequeaths the curse,
To find his faults; and yet himself make worse;
A precious reader, in poetic schools,
Who by his own examples damns his rules.[21]

ll. 47-50.

又 "Epistle to Congreve" (1694) 中では英詩のあわれむべき現状を論じ，Dryden は自分の後任として Congreve でなく Shadwell が Poet Laureate に任命された事を深く遺憾に思うと云う，何故なら Shadwell は次に Rymer によって継がれたから。[22]

But now, not I, but Poetry is curst;
For Tom the Second reigns like Tom the First.

ll. 47-48.

又同じ頃書かれた Dennis 宛の手紙中で Dryden は次の如く云っている。「……私は Mr. Rym〔er〕と共にわがイギリスの喜劇が古代人の何ものよりも遥かに優れていると結論せざるを得ません。そして我々の不規則性にも拘らず，我々の悲劇も優れております。Shakespeare は悲劇に対する天才を持っておりました，そして我々は Mr. R —の主張にも拘らず，天才のみがあらゆる他の資格を一緒にしたものよりも大きな美徳（若しそう呼び得るならば）であると知っております。この学識ある批評家が Shakespeare を罵った後，この世でどんな成功を見出したか君も御存知でしょう。彼が見出した殆んどすべての欠陥は確かに存在しています，しかし誰が Mr. Rym —を読み，或は誰が Shakespeare を読まないでしょうか？ 私自身としては Mr. Rym —の学識は尊敬してい

(20) Ward (ed.), 'Letter 26.' pp. 58-59. 猶 Dryden は "Examen Poeticum" 中で女王の政府を 'a government of blockheads' と皮肉った。
(21) Scott (ed.), 8, 345. *ll.* 47-05.
(22) 実際は前述の如く Poet Laureate になったのは Tate で，Rymer は Royal Historiographer になったのである。

ます，しかし彼の悪意と彼の尊大さはひどく好みません。実際私のような者は彼を恐れる理由は持っておりますが，Shakespeare はそんな理由を持っておりません。……」[23] この手紙でみると，これまで非友情的であった Dryden の Rymer に対する態度も，稍々平常の状態に戻りつつあるようである。

Dryden はその生涯の終り頃には Rymer と完全に仲直りをしたらしい。Dryden は再び Rymer に対する悪感情を洩らす機会を持たなかったし，Rymer も前述の如く Dryden の攻撃を敢えてしなかった。Dryden はその最後の作品たる *Fables* (1700) の序文中で「Chaucer は（諸君が我々の学識ある Mr. Rymer によって前に語られたように）Provençal から我々の不毛の言語を初めて飾り且つ豊富にしたのである。Provençal は当時すべての現代語中で最も洗練されたものであった。しかしこの問題は同国人たる我々から少からぬ称讃を当然受けているあの偉大な批評家によって詳細に取扱われている。」[24] と Rymer の学識と能力を再び称讃することが出来た。

ともかく Rymer は Dryden が Ben Jonson 以後のイギリスの批評家で敬服した唯一のものの如くである。上述の如くある時期においては両者は互に悪感情を抱いて相反撥したのであるが，Dryden の批評的活動の多くは Rymer の基準に対抗するための慎重な努力からなされたものとも考えることが出来よう。

---

(23) Ward (ed.) 'Letter 31', pp. 71-72.

(24) Ker, II, 249. Rymer は「事実我々のすべての近代詩歌は彼等 (*i. e.* Provencial Poets) から来ている。」(*A Short View of Tragedy*, Zimansky ed. p. 120) 又「この Provencial は音楽性と ryme の美しさを与え，且つそれと調子を合わせた近代諸言語の中の最初のものであった。」(*ibid.*, p. 126) そして Chaucer は Provençal の言葉を借りることによって英語を改良させた，又 Chaucer の詩は troubadours の詩を借りたものだと云う。(*ibid.*, p. 126) この二つの主張は Tyrwhitt がその *Canterbury Tales* (1775) で論破したものであるが，その時までは疑問とされずに同意されていた。Rymer 以前にも Chaucer を英語に磨きをかけた人であるとみなすのは既に一般的な考えであった。ただ Verstegen (*Restitution of Decayed Intelligence*, Antwerp, 1605, pp. 203-4) や Skinner (*Etymologicon linguae anglicanae*, London, 1671, pp. 203-4) は Chaucer の借用は本来のしとやかさと気品とを国語から奪ったものだと論じた。Chaucer の詩が Provençal の模倣であるということは Rymer はそれとなく云っているだけであるが，Dryden (Ker, II, 270) 及び Pope (*Rape of the Lock and Other Poems*, ed. Tillotson. London, 1940, pp. 243-4) においては明白に述べられている。Pope (Ruffhead: *A Life of Alexander Pope*, London, 1769, p. 425) と Gray (Letter to Warton, April 15, 1770, in *Correspondence*, ed. Toynbee anb Whibley, Oxford, 1935, 3, 1122-5) は共に英詩の歴史を Provence 派をもって書き始める計画を立てた。これらの計画と Chaucer は Provençal の詩を改作したのだという Rymer の信念からの影響は多分に Warton の *History of English Poetry* 中に残っている。

Rymer の Provençal の詩に関する記述の主なる出典は Jean de Nostredame の *Les Vies des plus célèbres et anciens poètes Provençaux* (Lyons, 1575) であるが，Rymer は同年 Giovanni Giudici がイタリア語に訳したものを使用した。(Zimansky, notes, pp. 250-1, 256-7)